

ダウン症幼児における情動調整：応答の違いによる分析を通して

Emotional Regulation at infant children with Down Syndrome :
Through an analysis by the difference in the replies.

小野里 美 帆*

Miho ONOZATO

要旨：本研究では、MA1歳のダウン症幼児6名を対象に、情動調整の様相を、大人の応答の関係によって明らかにすることを目的とした。手の届かないところにある玩具を要求する場面を設定し、要求時における情動表出と、その後の大人による応答の有無により、情動表出に変化の様相について分析を行った。その結果、応答条件においてのみ、情動表出に変化が認められた。ダウン症児の情動調整における大人の役割の重要性が示唆された。

キーワード：ダウン症幼児, 情動調整, 大人の関わり

I 序 論

ダウン症児は、言語表出の顕著な遅れ、見通しの困難さ、発達の個人内較差等の要因により、幼少期から‘がんこさ’や切り替えの困難さが指摘されている(池田ら, 1992)。「がんこさ」については、彼らのもつ特性という指摘(Dykens, 1997)のほかに、発達不相応な課題を要求されることの多さ等、大人による関わりの影響も考えられる。臨床現場で問題とされることが多いダウン症児における‘がんこさ’は、換言すると、「情動調整」の問題として捉えられるが、ダウン症児における情動調整についての研究は見当たらず、発達初期における情動調整研究も少ない。

情動調整は、最近になって注目された概念である。Coleら(2004)によると、情動調整とは、喚起された情動に関連する変化を指すとされている。情動調整については、Prizantら(2009)をはじめとして、自閉症スペクトラム児を対象とした支援において取り上げられ始めているが、上述したような情動の問題を抱えるダウン症児においても、情動調整の様相や支援方法についての検討が必要である。情動調整には、自律的に情動を調整する「自己調整」と、他者の援助により情動を調整する「相互調整」があることが指摘されている(Tronick, 1989)。情動調整の支

* おのざと みほ 文教大学教育学部

援を考慮した場合、相互調整、すなわち大人の関わり方を考慮することが重要になる。

本研究では、情動不全が生じやすい要求場面を用いて、ダウン症児における情動調整の様相と、大人の関わりによる影響について、予備的検討を行うこととする。

Ⅱ 方法

1. 対象児：ダウン症児6名（A児～F児）。精神年齢は平均20.5カ月（20～21カ月；MCCベビーテストによる）。生活年齢の平均は46カ月（40～52カ月）。
2. 実験場所及び場面：家庭訪問により実施。対象児は椅子に着席し、斜向かいに実験者が着席。小野里（2003）で使用した、対象児にとって新奇な玩具（Fisher Price社、紐引き車玩具）を用いた。玩具を使って実験者と①90秒遊び（親近化条件）、②手の届かない位置に60秒置き（取り上げ場面）、③再び玩具を戻す（再親近化条件）。実験者は、対象児の実験者に向けられた反応に対し、2条件で反応した。①応答条件：対象児の行動出現直後、取り上げられた玩具を注視し、対象児に顔を向けて「なあに？」と反応。②非応答条件：顔は向けるが3秒間反応せず、反応を遅延した。
3. 記録・分析方法：2台のカメラ録画を再生し、分析した。(1)実験者による反応前の情動：取り上げ場面時における情動を、須田（2002）を参考に「ポジティブな情動」（微笑み）、「ネガティブな情動」（怒り、恐れ、拒否）、分類不可の場合を「ニュートラルな情動」とした。情動表出としては、表情及び身体活動（机を叩く等）を採用した。(2)反応条件別にみた情動の変化：実験者の反応（応答・非応答）後、10秒以内における情動変化の有無について分析した。分析に際しては、2名による一致率を検討したところ、(1)が92.3%、(2)が90.2%であった。
4. 倫理面の配慮：本実験に際しては、保護者に研究の意義を書面で説明し、理解と同意を得た。

Ⅲ 結果

表1に、実験者による反応前後の情動を、図1に、実験者による反応の有無による情動の変化を図示した。反応前の情動は、ネガティブかニュートラルであり、実験者による反応後は、ポジティブ及びニュートラルに変化した。6名中5名については、実験者による応答条件のみ、情動の変化が認められた。ネガティブからポジティブへの変化を示した児が1名、ネガティブからニュートラルへと変化を示した児が3名、ニュートラルからポジティブへと変化した児が2名であった。B児のみ、応答・非応答条件いずれにおいても、情動の変化が認められ、いずれも、ネガティブからポジティブへの変化であった。

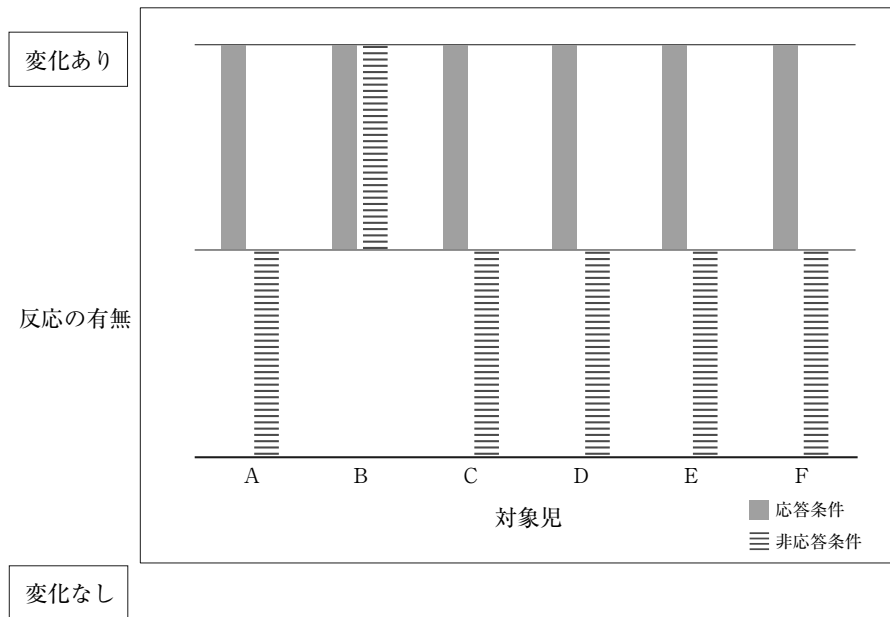


図1 応答条件の有無と情動表出の変化

表1 実験者による反応前後における対象児の情動

	実験者の反応	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児	F 児
応答条件	反応前	Non	N	N	N	N	Non
	反応後	P	P	Non	Non	Non	P
非応答条件	反応前	Non	N	N	N	N	Non
	反応後	Non	Non	N	N	N	Non

P：ポジティブな情動 N：ネガティブな情動 Non：ニュートラルな情動

IV 考 察

結果から、応答条件の方が非応答条件よりも、情動の変化、すなわち情動調整を促進する可能性が示唆された。応答条件が子どもの反応を変化させるという点では、要求行動の変化を検討した小野里（2003）の結果を支持する。一方、反応前の情動及び反応後の情動反応としては、ニュートラルな情動を示す対象児が最も多かった。このことは、0歳台において、ダウン症児が、「泣く」「笑う」という行動が少ないという報告（岡崎，1992）を支持する結果となった。ニュートラルな情動表出は、大人の応答性を引き出すという点ではネガティブに作用する可能性がある（小野里，2003）。そのため、情動表出が明確ではないダウン症児においては、大人側の応答における「敏感性」が重要であるといえる。このことは、近年臨床現場で重要視されている保護者支援においても留意する必要があるだろう。今回は、6名という少人数による予備的分析であったため、今後は、多人数による分析及び典型発達児との比較を通じた検討を行う必要がある

謝辞：本研究にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

参考文献

- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004) Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for a child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- Dykens, E. M., & Kasari, C. (1997) Maladaptive behavior in children with Prader-Willi syndrome, Down syndrome, and nonspecific mental retardation. *American J. of Mental Retardation*, 102, 228-237.
- 池田由紀恵 (1992) ダウン症児の発達と教育 明治図書
- 岡崎裕子 (1992) 社会性の発達と学校適応 池田由紀恵編著 ダウン症児の発達と教育 pp 103-120
- 小野里美帆 (2003) 発達障害児におけるコミュニケーション構造の発達と支援方法についての検討：評価尺度と支援プログラムの作成を通して 筑波大学博士論文：未公開
- Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E., Laurent, A. C., and Rydell, P. J. (2006) THE SCERTSR Model: Volume I Assessment. Baltimore, MD: Brookes Publishing
- 須田治 (2002) 情動アセスメントの考え方と実際 須田治・別府哲 (編著) 社会・情動発達 とその支援 ミネルヴァ書房 pp.160-170.